２０１４／０３／０９　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：重荷を下して生きる
聖書箇所：マタイの福音書　１１章２８－３０節

マタイ１１：２８－３０
:28 すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。
:29 わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。
:30 わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。

先ず、今私たちがこの箇所を見て気付くことは、ここには二つの約束が記されていることです。一つは、「神ご自身が求める者に休息を与える」ということです、２８節に**「わたしがあなたがたを休ませてあげます。」**と書かれています。もう一つの約束は２９節にありますが、「安らぎをもって生きることが出来る」です。**「たましいに安らぎが来ます」**と書かれています。

「休息」とは、何かしていることを止めて休むことです。仕事とか運動を止めて休むことです。そこからこのように言えます。今置かれている状況、状態から解放されていくということです。また、「安らぎ」とは、心がゆったりと落ち着いて穏やかなことです、どちらかと言うとこれは心の状態を指しています。この二つの約束を主イエス・キリストは人々にお与えになりました。神ご自身が、求める人に「休息」を、「安らぎ」を与えると約束なさったのです。そして、その安らぎを頂いたのがあなたです。クリスチャンであるあなたです。

クリスチャンの皆さん、どうぞ思い出してください。今見ているこの神の約束、神が「休息を与える」と言われたその休息を頂いたのがあなたであるということを…。クリスチャンはこの休息をもらっているのです。問題はその後です。２９節に**「たましいに安らぎが来ます」**とあります。「たましい」というギリシャ語は「感情の座としての心」を表わします。「心」はそこからいろいろな感情が湧き出て来るところです。それを表わすことばがここで使われています。ですから、主が言われたことは、あなたは神から休息を頂くことが出来る、そして、休息を頂いたあなたは、心がいつも安らいだ状態、心がいつも平穏な状態、そのような心であなたは生きることができるということです。そのような約束が与えられていると言うのです。そんな生活が神によって約束されているのです。

イエスはヨハネの福音書１４章でこんなことを言われました。１４：２７**「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」**と。ということは、イエスがお持ちであった平安をクリスチャンは頂いているということです。あなたはもう頂いているのです。だから、あなたはどんな状況にあっても心穏やかに過ごすことができるのです。そう思いませんか？なぜなら、イエスがお持ちであった完全な平安を頂いている私たちは、その平安を頂いているゆえに、どのようなことが日々起ころうと、その中にあって平安を持って過ごすことが出来るのです。これは可能なことです。実は、そのことをイエスがここで教えてくださっているので、私たちはそれ見ていきます。

今、皆さんに問いかけたいのは、このみことばは私たちに、あなたがもし望めばあなたは休息を得ることができるし、日々の生活にあって心安らかに過ごすことが出来ると教えるのですが、では、あなたはそのように日々を過ごしているかどうかということです。本当に心穏やかに、何が起ころうと心穏やかに過ごしておられるかどうかです。今から私たちが見るのは、では、どうすればそのような歩みができるのか？どうすれば、私たちは休息を頂いて、そして、心穏やかに日々過ごすことが出来るのか？そのことをここのみことばから見ていきます。

☆主の休息を得て、心穏やかに過ごしていくために

Ａ．休息を得る　　２８節

２８節**「休ませてあげます」**と主ご自身が言っておられます。主がここで言われた「休息」というのは、肉体的な休息よりもどちらかと言うと「霊的な休息」のことです。救いのことです。どうしてそう言い切れるのか？この文脈です。実は、マタイの福音書１１章と１２章を見ると、ここには救い主イエス・キリストに対する人々の反応が記されています。なぜなら、１章から１０章までに、イエスがいったい

だれなのか？ということを明らかにしています。たとえば、１～２章には「イエス・キリストの誕生」は預言の成就であったことが記されています。イエスの誕生は奇蹟的であったことが記されています。そして、３章には、イエス・キリストがバブテスマを受けられるのですが、その時に、天から「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」と告げる声が聞こえました。つまり、父なる神がこのイエスこそがご自分が遣わす方であることを明らかにしたのです。父なる神の証言です。

４章になると、イエス・キリストはサタンの誘惑をお受けになります。そして、その誘惑に勝利なさいます。また、多くの病人たちをいやされる様子が記されています。それによって彼が真の神、救い主であることを明らかにしたのです。５～７章は有名なイエス・キリストの権威ある教えです。「山上の説教」が出て来ます。それを聞いて人々は驚いたのです。この人はいったいどこからこのような権威を得たのか？と。そのことをもってイエスがだれであるかを明らかにしたのです。８～９章では、数々のいやしと奇蹟が記されています。そして、イエスが罪の赦しをお与えになっています。１０章では１２弟子が送られていきます。イエスが救い主であることを伝えるためにです。

ですから、こうして文脈を見ていくと、11章もそうですが、このようにこの世に来られた救世主イエス・キリスト、その救世主に対して人々がどのように応答するのか、どのようにこの救世主を受け入れるのか、また、拒んでいくのか？そのことが記されています。ですから、このように文脈を見た時に、**「休ませてあげます」**が何を指しているのかは明らかです。**「あなたがたを休ませてあげます」**、霊的な休息を与える、つまり、「救い」を与えるということです。そして、２８節には救いを得るための三つの条件が記されています。

１．救いを得るための三つの条件

１）自分を知ること

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、」とあります。つまり、自分で自分を救えない、自分は自分を救うことができないということを理解している人、そのことが最初に記されています。

・**「疲れた人」**：もうくたくたになるまで働いた人です。一生懸命頑張って、一生懸命努力をして天国に入ろうと努力している人のことです。天国に入るに相応しい人になるための努力をしている人のことです。頑張っても頑張っても、完全な人になれないゆえに疲れ果てているのです。

・**「重荷を負っている人」**：ある時に重荷がその人の肩に載せられたのです。救われるために「こういう律法を守りなさい」と言われた時に、頑張ってみようとしますが、残念ながら、その律法のすべてを守ることができません。そうするとそれが自分にとって大変な重荷となっていきます。守れない律法を守るようにと要求されたとき、それはその人にとっての大きな重荷です。実際にそのようなことがこの時代に行なわれていたのです。教師たちは自分たちは教えるだけで人々の上に大きな重荷を載せたのです。「これらのことを全部守りなさい」と。マタイ２３：４に**「また、彼らは重い荷をくくって、人の肩に載せ、自分はそれに指一本さわろうとはしません。」**とあります。ルカ１１：４６にも同じことが記されています。**「しかし、イエスは言われた。「おまえたちもわざわいだ。律法の専門家たち。人々には負いきれない荷物を負わせるが、自分は、その荷物に指一本さわろうとはしない。」**と。教師たちはこれらの律法を守りなさいと言います。大変な数の律法です。それを聞いた者たちはもうどうしたらいいのか分からない、彼らにとって大変な重荷となったのです。

結論：

先ず、イエスが言われることは「救いに与るために、自分がどんなに努力しても心を清めることは私には絶対に出来ません。自分自身によって救いを得ることは不可能ですと言う、そういう人にこの救いが与えられる」ということです。ローマ書３：１０に**「それは、次のように書いてあるとおりです。「義人はいない。ひとりもいない。」**、すべての人が罪を犯したとあり、２３節には**「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、」**と書かれています。つまり、どんなにあなたが頑張っても努力しても、どんなに心を入れ替えて良いことをやろうとしても、あなたのいかなる行ないも神の基準には到達しないということです。だから、行ないによる救いは不可能なのです。自分を満足させることは出来るでしょう、これだけの努力をした！と言って…。でも、問題は自分を満足させることではなくて、赦しを与えてくださる神を満足させることです。その神が言われます。「どんな努力も、たとえ、人間が善行だと言ったとしても、どんな働きも、どんな行ないも救いを得るためには不十分だ。」と。

皆さん、私たちは余りにも罪に汚れているからです。イザヤがこのように言っています。イザヤ書６４：６**「私たちはみな、汚れた者のようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のようです。私たちはみな、木の葉のように枯れ、私たちの咎は風のように私たちを吹き上げます。」**、もうどうすることもできない、汚れ切った者だと言うのです。私たちがその汚れを一生懸命、自分の努力で洗ってきれいしようとしても、

私たちはそれを行なうことが出来ないと。
　ですから、まずイエスが「霊的休息」、救いを得るために必要なのは、私は自分で自分を救うことが出来ないと、そのことに心から気付くことだと言います。
２）信じること
　２８節に**「わたしのところに来なさい」**とありますが、実は、原語ではこの**「来なさい」**が最初に出て来ます。
（１） 主の招き：**「来なさい」**と主ご自身が人々を招いておられるのです。
（２）その意味：この**「来なさい」**とは「信じること」を意味します。なぜなら、イエスはこう言っておられます。たとえば、ヨハネ７：３７**「さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた。「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。」**、これは普通の水のことを言っているのではありません。救いのことです。一生懸命努力をして、天国に入れるような完全な清い人になろうと頑張って来たけれども、自分には出来ない、そうして渇いている人は「わたしのところに来なさい。わたしがその水を与えるから。」と言われるからです。預言者エレミヤはこのように言っています。エレミヤ書３１：２５**「わたしが疲れたたましいを潤し、すべてのしぼんだたましいを満たすからだ。」**と。神が私たちに救いをお与えくださると言います。だから、イエスは「来なさい。わたしのところへ。わたしを信じなさい。そのことによって救いを得ることが出来るから、霊的休息を得ることができるから」と言われたのです。
　しかし、人々はこの救いを受け入れようとはしませんでした。主イエスを信じ受け入れることをしなかったのです。恐らく、皆さんも何度か次のようなことをお考えになったことがあると思います。イエスの救いのことを話して、いったい、何人の人たちがそれに心を開きますか？このすばらしい救いがあることを話しても、殆どの場合、人々はそれに心を開こうとしません。思いませんか？なぜ、こんなにすばらしい罪の赦しがあるのに、人々は信じようとしないのかと。なぜ、新しく生まれ変わることが出来るのに、そして、永遠のいのちを得ることが出来るのに、人々はそれに対して心を閉ざしてしまうのか？と。ヨハネはこう言っています。ヨハネの福音書１：１１**「この方はご自分のくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。」**と。すべてをお造りなった神がこの世に来られたのに、人々は自分たちを造ってくださった神を信じ受け入れようとしなかったのです。非常に悲しいことです。
＊どうして受け入れないのか？　→　主ご自身がその理由を語っておられる
（１）救いよりも知識を愛するから：聖書を知りたいと思って聖書を読む人はたくさんいますが、彼らは聖書の神は信じようとしません。聖書は知っていても聖書の神は知らないのです。それで満足しています。彼らは救いよりも知識を愛するからです。ヨハネ５：３９－４０**「:39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。:40 それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。」**。
（２）神よりも悪を愛するから：自分の好きなように、自分の思い通りに生きていきたいのです。自分が楽しければそれでいいのです。自分のやりたいことさえ出来たらそれでいいのです。そうして人は神を拒み続けるのです。ヨハネ３：１８－１９**「御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれている。:19 そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行いが悪かったからである。」**。
　マタイ１１章をもう一度見てください。２０節から、コラジン、ベツサイダ、そして、２３節にカペナウムという町の名前が出て来ます。ガリラヤ湖の北にある町々ですが、これらの町をイエスは非常に厳しく責めています。なぜなら、彼らはこの主に対して不信仰だったからです。そして、彼らの問題についてイエスがお話しになっているのが２５節です。１１：２５**「そのとき、イエスはこう言われた。「天地の主であられる父よ。あなたをほめたたえます。これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、…」**、つまり、彼らの問題は彼らのプライドだったのです。彼らは知的と霊的において非常に高慢でした。
＊彼らのプライドがもたらしたこと
（１）自分たちの福音を創作した
　彼らは「自分たちには知恵がある」ということで、自分たちの福音を創作していくのです。自分たちの知恵や考えに基づいて自分たちの福音を作り上げていったのです。どんな福音か？それは「行ないによる救い」です。ユダヤ人たちの間で律法というと四つの意味がありました。
＊律法　＝　ⅰ．モーセの十戒　ⅱ．モーセ五書（創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記）
　　ⅲ．旧約聖書全体、ⅳ．律法学者たちの伝統
　初期のユダヤ教においては、書かれた律法、これはモーセ五書を指しますが、これと口伝律法という、

口で伝えるという律法が存在していました。口伝律法とは、ユダヤ教における生活と宗教の規範としての父祖たちの言い伝えです。昔からのいろいろな言い伝えがあって、それを書き記してそれを律法としたのです。バークレーはこのように言っています。「イエスの頃には、厳格な正統派のユダヤ人にとって、神に仕えるということは数千の規則、法則を守ることであった。」と。このような時代だったということです。大変なルール、教えがあったのです。これを全部守らなければいけなかったのです。それを努力した人たちはみな疲れ果てます。みなその重荷に押しつぶされそうな状況にあります。でも、確かに、みことばが言うように、賢い人たち、知恵のある人たちは自分たちの救いというものを作り上げるのです。

（２） 主イエスの福音を拒絶する

主イエス・キリストが与えた福音を拒絶するのです。なぜか？自分たちの福音によって、自分たちは救われていると確信していたからです。最初にも話したように、このユダヤ教の教師たちは、自分たちは間違いなく天国に行けると思い込んでいました。なぜなら、自分たちはこの律法を完璧に守っていると思っていたからです。ですから、そのような彼らは、主イエス・キリストの贖いによる救いのメッセージ、聖書の教える福音を聞いても「我々には関係ない。だって我々はもう罪赦されているし、救われて天国に行けるのだから、そんな救いは私たちには不要である。恐らく、異邦人がそういう福音を必要としているでしょう。」と。ですから、彼らはイエス・キリストによる福音の必要性を感じないのです。でも、みことばが教えるように、そのような人々に対して主イエスは救いのメッセージを語り続けておられます。「わたしのところに来なさい。わたしを信じなさい。」とイエスは語られました。こうして一人でも多くの罪人がこの救いに与るようにと、罪人を招き続けておられるのです。

預言者エゼキエルはこのように言います。エゼキエル書３３：１１**「彼らにこう言え。『わたしは誓って言う。――神である主の御告げ――わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。』」**。イザヤ書５５：３にも**「耳を傾け、わたしのところに出て来い。聞け。そうすれば、あなたがたは生きる。わたしはあなたがたととこしえの契約、ダビデへの変わらない愛の契約を結ぶ。」**とあります。驚くべき真理は、創造主なる神は、その創造主に逆らい続けている私たち罪人に対して救いの御手を差し伸べておられるということです、私たちをまだこの救いへ招こうとしておられるということです。そのことを私たちはこの２８節のみことばを通して今学んでいるのです。

私たちは救いに与るために何をしなければならないのか？先ず、自分を正しく知りなさい、自分で自分を救うことは出来ないのだからと。そして、このイエス・キリストを信じなさいと。

３）悔い改めること

もう一つは「悔い改めること」を命じています。というのは、この２０節のみことばを見ると**「それから、イエスは、数々の力あるわざの行われた町々が悔い改めなかったので、責め始められた。」**と書かれているからです。主イエス・キリストがメッセージを語り、奇蹟を行なったにも関わらず、多くの町々の人たちはこの主を信じ受け入れようとしなかったのです。自分たちの罪を悔い改めて、主の救いに与ろうとはしませんでした。そこでそのことを命じるのです。もう一度２５節のみことばを見てください。**「…これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、」**、彼らは自分で自分がもう救われた者だと信じ込んでいたゆえにイエスの福音を拒んだのです。ところが、その後に**「幼子たちに現してくださいました。」**とあります。つまり、この救いに与るためには、まさに、幼子のようでなければならないということです。

片や、あるグループの人たちは、自分たちが知恵のある賢い者であることを誇っていました。彼らは神の知恵ではなくて、人間の知恵に頼っていたのです。しかし、主が言われたことは、神が働かれるのはまさに幼子のように神の前に心砕かれた人々であると言うのです。覚えておられるでしょう？二人の人が祈るために宮に上った時に一人はパリサイ人でした。ルカ１８：１０－１４「:10 **「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。:11 パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。:12 私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』:13 ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』:14 あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」**。パリサイ人は自分のことを誇っていました。「こんなにすばらしい行ないをしています。」と。ゆえに、彼は義とされると確信していました。もう一人は取税人でした。彼は悲しみゆえに**「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。」**と言います。**「この人が、義と**

認められて家に帰りました。」とイエスは言われました。神が喜ばれる心の態度は「砕かれた悔いた心」です。「神様、私は本当に罪深い者であり、あなたのさばきを受けて当然の者であり、そして、永遠のさばきこそ私に相応しいことが分かっています。でも、どうぞ、私をあわれみ私を救ってください。」と、そのように謙虚に主の前に救いを求めていく者たちです。詩篇５１：１７に**「神へのいけにえは、砕かれた霊。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。」**とあります。私たちは気付かないといけません。神の前にプライドは神が喜ばれるものではないということです。神の前に必要な態度、神が喜ばれる態度は「砕かれた悔いた心」であると。

結論：

ですから、この２８節で、イエスはこうして三つの条件を挙げられました。私たちは自分で自分を救うことが出来ない者、そして、備えられたイエスを心から信じ、そして、自らの罪を心から悔い改めなさいと教えます。そういう人にこの霊的な休息、救いというものが与えられると言うのです。ここにおられる多くの皆さんはその救いに与ったのです。その救いを神から頂いたのです。この霊的休息を頂いたと。なぜなら、あなたはこの神の招きに応じていったからです。

Ｂ．安らぎをもって生きる　　２９－３０節

２９－３０節には今度は「安らぎをもって生きる」ということが約束され、そのことが記されています。２９節に**「…あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。」**とあり、ここには二つのことが命じられていることを見てください。

１．主のくびきを負う

「わたしのくびきを負う」とはどういうことでしょう？「くびき」ということばは皆さんはよくご存じでしょう。その当時、馬や牛が荷車を引く時に動物の背中につけた物です。荷車と動物とを棒でくっつけて鋤などをつけて引いていったのです。実は、農夫が動物にくびきを負わせるときはその動物をコントロールしたのです。そうでなければ動物が好き勝手をして作業がはかどらないからです。農夫が望んでいる方向と違う方向に進む可能性があります。だから、このくびきを負わせて動物をコントロールしたのです。ですから、「くびきを負う」とはこのように言えます。神のご支配のもとに、神のそのコントロールに従うということです。ですから、古代においてこの「くびき」ということばは「従順」の象徴として使われているのです。動物にくびきを負わせることで主人に従って行く。ですから、ここでイエスは「あなたがたましいに安らぎを持ち続けて行くためには従順が必要だ」と言われたのです。

２．主から学ぶ

「わたしから学びなさい。」とあります。「学びなさい」は動詞ですが、この名詞形が「弟子」ということばです。ですから、「わたしの弟子としてわたしから学び続けていきなさい」ということです。神のみことばを学び続けていくこと、そのことを教えているのです。神のおことばを通して私たちは大切なことを知っていきます。私たちの神がどんなお方であり、何が神のみこころなのか、そのことをこの神のみことばから知ることが出来ます。

この二つのことをイエスはお話しになったのです。みことばに従順に従うように、主のみことばを正しく学び続けていくようにと。

３．結果

２９節のその後には**「そうすればたましいに安らぎが来ます。」**と続きます。もし、あなたがこのように歩むならば、あなたのたましいに安らぎが来ると言うのです。「たましい」とは先に見た通り、感情の座である心のことです。その心がこの安らぎで満たされ続けるということです。皆さんも経験されているように、神のみことばを学び実践することによって、神の言われていることがより信じるに値するものであるという、そのような強い確信を持ち続けて行きます。その確信は成長していきます。また同時に、神に対する信頼がより増していきます。本当に神は生きておられ、言われたことを実現なさるお方であると。

ですから、私たちが神への信頼を増して行くことによって、間違いなく、私たちの心に安心がもたらさせます。何があっても神がちゃんと守っていてくださるし、神がちゃんと満たしてくださる、導いていってくださる、「私の神はこのような神なのだ」という確信が大きければ大きいほど、私たちの心は安らぎます。イエスは「あなたがもし主に対して従順に従っていくなら、みことばを学びその教えに従っていくなら、そこに心の平安がある。」と言われます。みことばの凄いところは、どのように歩めばこのすばらしい祝福をもって今日生きることが出来るかを教えてくれることです。

確かに、毎日の生活を見るといろいろなことが起こります。いろいろなことが私たちの心を騒がせます。でも、みことばは「その中にあってもあなたのたましいにあなたの心に安らぎをもって生き続ける

ことが出来る。」と言います。

４．それが可能な理由

イエスは言われます。３０節**「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」**と。どんな状況でも、私たちの心がそのように安らぎの中に保たれ続け、安らぎをもって歩み続けることができるのです。どうしてでしょう？

１）わたしのくびきは負いやすい

「負いやすい」とは「快適、快い、よく調整されている」という意味です。思い出してください。この２９節で「くびきを負いなさい」と言われました。従順に従っていきなさい、神が言われていることに喜んで従っていきなさいと見て来ました。イエスは「くびきは負いやすい」と言われました。ということは、そのみことば、主のみこころに従っていくということは、あなたにとって苦痛ではないということです。その証拠に、イエスによって救われた私たちは、新しい願いを持って生きる者に変えられました。「神に喜んで頂きたい。そして、神がおっしゃることを実践して行きたい」と、そのように皆さんは生きておられます。いやいや生きていますか？「神さまはこう言ってる。でも、私は余りやりたくない。でも、やらなくてはいけないから…。」と、そうではなくて、神の前を正しく歩んでいるあなたは、主のみこころがこれだと示されたら「神さま、そのように生きていきたいです」と、そのような思いをもつのではないですか？

２）わたしの荷は軽いから

イエスは「わたしのくびきは負いやすい」と出来ないことを言われているのではありません。その証拠に次に**「わたしの荷は軽いからです。」**と続いています。軽いから十分に負えるということです。つまり、主イエス・キリストがこのみことばを通して私たちに教えてくださる神のみこころ、神の命令は、私たちに決して出来ないことではないということです。凄いことでしょう、皆さん！　でも、私たちは神のことばを聞いた時に「それは無理だ！」と思います。例えば、「いつも喜んでいなさい」と実際に学んで来ましたが、「でも、いつも喜び続けるのは現実的に難しすぎる」と思います。そうです難しいです。でも、神には難しいことはないのです。喜べる時に喜ぶのはこの世の中のみなもそうです。でも、イエスによって救われた私たちは喜べない状況で喜べる、感謝できない状況で感謝できるのです。

そして、そのことを通して神ご自身がご自分を明らかにして来られたのです。ということは、皆さん、聖書が命じていること、神があなたに命じていることはあなたには可能なことなのです。あなたはそれを聞いて無理だと思うかもしれない、でも、それはあなた自身がそう思うだけであって、神は「出来る」と言われるのです。「神さまは私ことを分かっておられない！私はだれかのように信仰は強くないし、信仰歴も短いし、まだまだ信仰的に幼いから…」と言っても、神はそのことをすべてご存じで「あなたには出来る」と言われるのです。なぜなら、例外はないからです。

もし、ここにいる兄弟姉妹の皆さんが、この真理をしっかりとつかみ取って、神の命令されていることは実践できるという確信を持たれたら、あなた自身は変わって来ると思いませんか？なぜなら、そのようにみことばが教えているからです。もちろん、私たちの知恵や力で頑張ってみようとしても無理です。私たちがやって来たように…。そのように聖書は教えていないでしょう？私たちには神の助けが必要なのです。神はあなたの弱さを知って、そして、あなたがどこまで耐えられるかを知っておられるから、それを知った上で、あなたに様々な訓練の場を与えてくださるのです。それを通してあなたの信仰を強めていこうとされます。私たちに必要なことは、どんな時にあっても、しっかりと主を見上げ続けることであり、私たちが持ち続けるべき確信は、神の命令を神の助けによって実践出来るという確信です。そのことを神はここで教えてくださっているのです。

もし、それを持っていなければ、私たちはいつもぐらつくのです。ここに約束されたように、神はたましいに安らぎを与えてくださるのです。でも、条件があったのです。あなたは従順にみことばに従っているかどうか、みことばを真剣に正しく学び続けているかどうかと。学んだことをあなたが実践することによって神はこの約束をくださった。でも、私たちが「神はそうおっしゃっているけど私には不可能です。」と思っているなら、残念ながら、この約束の祝福をあなたは経験することは出来ないのです。ひょっとすると、それがあなたの問題かもしれません。神のおっしゃっていることを信じ切ることが出来ない…。

でも、皆さん、この地上にあって私たち信仰者は、神の言われたことを信じて、そして、神に用いられながら生きることが出来るということです。皆さんよくご存じのみことばですが**「神を愛するとは、神の命令を守ることです。」**、Ｉヨハネ５：３です。その後何と書かれていますか？**「その命令は重荷とはなりません。」**です。みことばを通して、神がこうしなさいと言われたことを守ることが神を愛すること

だと、そして、その命令を守ること、それは私たちにとって重荷ではないと言うのです。なぜなら、神がその助けをくださるからです。
　このような信仰者でありたいと思いませんか？神が教えられたこと、神が命じられたことを見るときに、私たちの経験や思いによって「出来る、出来ない」を判断するのではなく、神が約束されたことに対して「このような人に私を変えていってくれる。こういう人に私は変えられていく。主よ、どうぞ、ここに記されているような人に私を変えていってください。」と、もし、あなたがそのような信仰者になるならば、あなたは大いに神の栄光のために用いられると思いませんか？そのような信仰者が必要なのです。神のことばをそのまま信じ、そして、神のことばに立って生きる信仰者です。
　イエスはこのように言われます。２９節の初めに**「わたしは心優しく、へりくだっているから、」**と。なぜ、こんなことを言われたのでしょう？イエスはあなたの上に大変な重荷を載せるような教師ではないということです。イエス・キリストは**「心優しく、へりくだっているから、」**、あなたに重荷を負わせるのではなく、重荷を除いて、あなたの心に安らぎを与える、そういう神だと言っているのです。
＊クリスチャンは、
・主から平和をいただいた　＝　信仰者の皆さん、あなたがこのすばらしい救いに与った時に「神との平和」を頂きました。ローマ５：１が教えます。**「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」**。
・主の平安をいただいた　＝　そして、神との平和を頂いたあなたには、神の平安が与えられました。先に見た通りです。ヨハネ１４：２７**「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」**
・主の安らぎをもって生きることが可能である　＝　そして、神の平安を頂いたあなたは、主の安らぎもって今日を生きていくことが出来るのです。心に神の安らぎをもって生きることが出来る、そういう人へと生まれ変わったのです。問題は、そのようにあなたが生きているかどうかです。
　みことばは私たちにどのように生きていけばいいのかを教えてくれました。問題は、私たちがそれを実践することです。どうぞ、信仰者の皆さん、主のみことばを正しく学びながら、そのみことばに従順に従っていかれることです。そのために主はちゃんと必要な助けを与え続けてくださいます。その時にあなたの心は神の安らぎでもって守られ続けていくのです。このような人生を送れるのです。そして、あなたがそんな人生を送るならば、あなたを通してこの安らぎの神が明らかにされていきます。どうぞ、このように生きていきましょう！このように歩んでいきましょう！そして、私たちを通して神のすばらしさが益々周りの人たちに明らかにされていくように、平安を頂いた者として、平安を持って歩み続けてください。

《考えましょう》
１．どうして人の考える福音には、救いがないのでしょうか？　また、人が救いを拒むのはどうしてでしょう？
２．どのようにして、神の平安を得ることができるのでしょうか？
３．神の安らぎをもって日々過ごすことは可能でしょうか？　どうすればよいのでしょうか？
４．今日、あなたが主に対して決心したことを記してください。